

## 啄木短歌私記

桂 孝 二

啄木というと、その感傷性によって人々に愛され、また、それによって軽視されるという風が一般にある。啄木を軽視することによって自分の見識の高さを誇ることもないでもないようである。しかし、筆者は、明治末年、しかも数え年27才で死去した啄木であり、その作品や日記・書簡等を見てゆく時、今日なお、今日を語っているかに思われるものが多いことなどから、成長してゆく啄木、惜しいところで死んでしまった啄木(注1)を悼まずにはいられないのである。

筆者は啄木短歌をこのように解しようという考えから本稿を書いた。つまり啄木の短歌作品を作歌時点に戻し、その時、または、そのころ、あるいは年月がへだたっていても関係ありと見られるところの啄木の歌やことばを拾い出してゆくことによって、啄木短歌を理解してゆこうとするのである。もっとも、本稿では不十分な点もあろうと思われるが、後日の増補を考えつつとりあえずまとめておくこととした。

さて、ここに記した啄木短歌10首は筆者が任意に選んだもので、啄木の代表作を選ぶ考えからではない。しかし、いろいろの面から注意すべき作と見たもので、これをふくらませてゆくと啄木短歌の全貌ともいべきものに近づいてゆくと筆者は考えている。つまり、「啄木短歌私記(第二)」「同(第三)」……と続けて書いてゆこうというつもりでいる。

なお、つぎの諸点について御諒承いただきたい。

- (1) 紙数のつごう上、引用歌を一行書きとし、行かえの個所を一字分空白としたこと。
- (2) 啄木の文章を引用する時、現代文で書かれているものは現代かなづかいに改め、同時に若干の漢字をかなに改めたこと。
- (3) 作品につけた番号は歌集での番号である。句読点のないものが『一握の砂』、あるものが『悲しき玩具』の番号である。従って、番号のない作は歌

集に収められなかった作である。

(1)

女なる君乞ふ赤き叛旗をば手づから縫ひて我に賜へよ(歌稿ノート『暇ナ時』)

啄木の歌稿ノート『暇ナ時』の明41.6.25日の「夜2時まで」と記された141首中の1首である。

この歌は同月22日の「赤旗事件」に触発されて作られたものであろう。この事件は山口孤剣が仙台監獄から放免になって帰京したのを歓迎する会が神田錦輝館2階広間で50~60名の出席者で行なわれた。当時、社会主義者は、直接行動派と議会主義派とに分かれていたが、その合同で歓迎会が開かれたのである。その会では、講談・薩摩琵琶が順次行なわれたが、剣舞「本能寺」となって、「敵は備中にあり汝能く備へよ」の句に至るや、大杉栄・荒畑勝三らが「ああ革命は近づけり」の革命歌を高唱し、「無政府」「無政府共産」「革命」と書いた3本の赤旗をひるがえしデモを始めた。会場内では議会派に対するデモであったが、会場外へ出ると警官と衝突し、結局、堺利彦・山川均・大杉栄・荒畑勝三その他計14名が神田署へ拘引された。その中に小暮れい・管野すが・神川マツ・大須賀サトの女性も加わっていたのである。この被告たちに対して留置場ではリンチの限りが尽されたという。この事件は山県有朋系の官僚の仕組んだ挑発事件であり、社会主義者の取しまりに緩漫であると見られていた西園寺内閣が、この事件によって辞職(6月27日辞意, 7月4日辞職)した。(注2)そして、それに代ったのが桂内閣であり、その政綱の中に「(前略)社会主義=係ル出版集会ヲ抑制シテ、其ノ蔓延ヲ禦グベキナリ」とあるごとく社会主義運動を圧迫しようという方針となった。この赤旗事件は後の大逆事件の一原因となっていると考えられ、大逆事件時の内閣はこの桂内閣であったのである。(注3)

啄木はこの事件について当時の彼の日記には何も書いていないが、大逆事件後に書き、未発表に終わった「所謂今度の事」と題する文章の中で、赤旗事件で警吏に捕えられた者の中に「数名の年若き婦人もあった。その婦人ら——日本人の理想に従えば、穏しく(マッ)、しとやかに、よろずに控え目であるべきはずの婦人らは、厳かなる法廷に立つに及んで、何の臆するところもなく面(おも

て)を掲げて、『我は無政府主義者なり。』と言った。それを伝え聞いた国民の多数は目を丸くして驚いた。」と書いている。驚いたのは国民でもあろうが啄木自身も大いに驚き、感動したのであろう。その驚きが赤旗事件3日後のこの歌となっているのであろう。

啄木が社会主義に共鳴したのは北海道時代であるが、真にそれに打ちこみ始めたのは明治43.6月の大逆事件からである。そして、奇しくも赤旗事件の女性の一人である管野すがが大逆事件の中心の一人であったのである。

啄木は小説家になろうと考えて明治41.4月に上京、小説を書いたが全く売れない。生活困窮の中で死ぬことを考えたりしている。そういう中で6月14日より作歌を始め、歌稿ノート『暇ナ時』を作り、それに作歌を記しているが、そこには当時の啄木の心境がまざまざと記されている。その6月25日夜、141首の歌を作っているが、その中に上記の歌とともに次のような歌も見えるのである。

君にして男なりせば大都会すでに二つは焼けてありけむ  
 若しも我露西亜に入りて反乱に死なむといふも誰か咎めむ(注4)

## (2)

437 手套を脱ぐ手ふと休む

何やらむ

ころかすめし思い出のあり(『一握の砂』)

「創作」(1の3.明43.5月)に見える作であるがこの歌の原型として次の歌がある。

褐色(かついろ)の皮の手袋脱ぐ時にふと君が手を思ひ出にけり(「東京毎日」明43.4.8)

この「東京毎日」発表歌では、すっかり言い終っていて余情がないと考えて、心に浮んだものを追い求めているように改作したのであろう。

啄木は短歌についてこう言っている。

「きれぎれに頭に浮んでくる感じを後(あと)から後からとぎれとぎれに歌ったって何もさしつかえがないじゃないか。」「一生に二度と帰って来ないの

ちの一秒だ。おれはその一秒がいたい。ただ逃がしてやりたくない。それを現すには、形が小さくて、手間暇のいらぬ歌が一番便利なのだ。」（「一利己主義者と友人との対話」「創作」1の9、明43.11）

この歌については、この、作者自身の歌論がよく説明している。しかし、啄木は同じことをこうも言っている。

「僕にとっては歌を作る日は不幸な日だ。刹那刹那の偽らざる自己を見つけ、満足する外に満足のない、全く有耶無耶に過した日だ。」（「瀬川深宛書簡」明44.1.9日）（注5）

こういう事情から啄木短歌に一種の弱さ、はかなさが漂うことがあるのであろう。

さて、この啄木の歌のように刹那の心動きを捉えたものとしてつぎのような作がある。

白ざれの粟稈島に立ちとまり何思ひしか今忘れたり（明45） 島木赤彦

赤茄子の腐れてゐたところより幾程もなき歩みなりけり（明45） 齊藤茂吉  
物忘れたる思ひに心づきぬ汽車工場は今日休みなり（大2） 伊藤左千夫

これらは、上記啄木作と同じような心動きを捉えているが、作者が違うだけ歌風も違っている。赤彦作はきっぱりしていて、啄木の初案「褐色の」の歌と似ているが、こちらは農村風物を材としている。茂吉作は、単純なのか、手がこんでいるのか、赤茄子が腐って地面に落ちている毒々しいその色から作者が何を連想したかに関心を持たせるだけの強いしらべを持っている。左千夫作は他と異なって、心づいたものが何かを詠じている点が違っていて、心づいたと言っている点に安定感があり、その晩年の作だけあって平淡味がある。

明44.3の「アララギ」（第4巻3号）で、島木赤彦は、

手も足もはなればなれにあるごときものうき寝覚かなしき寝覚

という啄木の「早稲田文学」（明44.1）所載の三行書きの歌を一行書きに記して、「石川啄木という人のは名はたまには見たが歌を見せられたのはこの歌が始めてである。」と記し、「手も足も離れ離れにある如き、というような事もある大なる感想中の一材料として点ぜられる場合ならば生動せぬ事もないがこのような感じ（筆者記、「ものうき寝覚かなしき寝覚」をさしている）の主部乃

至全部を占領している場合には余程作者に同情してみても感覚的であるという以上の深味を発見することはでき難いのである。」と評している。この評は全文を記さねばならぬのであるが、ここで筆者が言いたいのは、赤彦がこのように軽視・蔑視している啄木の「褐色の皮の手袋云云」の歌と同趣旨の歌を二年遅れて発表していることである。赤彦はそれにもし気付いたらどのように言うであろうか。このように啄木の歌はアララギの人々より早くその種の歌を作っているのである。

そのことについて、芥川竜之介は、茂吉が種々の歌を作った他に「啄木の残して行った仕事を——あるいは所謂生活派の仕事を今もなお着々と完成している。」（『芸術的なあまりに 芸術的な』昭2）と言い、折口信夫は「啄木以後、歌は変化してきたが、これはある部分まで啄木の力によるものである。」（折口信夫全集第5巻「石川啄木より出て」（取意）と言っているのである。啄木短歌は啄木独特のものであるけれど、普遍性を持っていたというべきであろう。

### (3)

21こみあへる電車の隅に

ちぢこまる

ゆうべゆうべの我のいとしさ（『一握の砂』）

「創作」（1の3，明43.5）に発表された「手を眺めつつ」15首中の1首である。その一連の中につぎのような作も見える。

54非凡なる人のごとくにふるまへる 後のさびしさは 何にかたぐへむ

55大いなる彼の身体が 憎かりき その前にゆきて物を言ふ時

こういう勤めの日日の、くたびれて帰る車中の心を詠んでいるのである。

なお、この歌は歌体としてつぎのような歌と同じ形式を持っている。

ゆく秋の大和の国の薬師寺の塔の上なる一ひらの雲 佐々木信綱

たびびと の め に いたき ま で みどり なる ついぢ の ひま

の なばたけ の いろ 会津 八一

これらは文章論でいうと述語がないのである。それぞれの歌のはじめから第五句の一部までが「いとしさ」「雪」「いろ」を修飾しているのである。それ

故、これらの歌の意味は「……のいとしさよ」という風になる。筆者はこういう歌体を喚体歌と名づけ、それが、啄木短歌の一特色であると考えている。  
(注6)極めて一本調子の歌なので、感動が深く、かつ、末尾の句がしまらなければ歌としては成功しないであろう。

さて、この啄木の作が掲載された「創作」の同じ号に土岐哀果のつぎの作が見える。ローマ字書きで発表されているが漢字かな交りに改めておく。

うつら、うつら、

電車の隅に、

わが家に近づけばさめるさびしい慣ひよ！

啄木の「こみ会へる電車の隅に」とこの歌とが同時に同雑誌に発表されたことは興味深い。そして、啄木の歌は一本調子の喚体歌で三行書きにする必要が必ずしもないのに対し、哀果作は倒置あり、省略ありで、三行書きにふさわしい作であると思う。

さて、このころから、啄木・哀果の二人によって電車通勤のサラリーマンの生活が短歌の素材となってきたのである。一首ずつを抄出しておく。

14途中にて乗換の電車なくなりしに、泣かうかと思ひき。雨も降りてゐき。

啄木

・毎日、あさ、電車に乗りて、思ふには、車掌より、われ、すこしは、よきかな。

哀果

前記の歌を合せて、啄木の歌には暗さがあり、哀果の方は軽くて余裕があるようである。そのことを啄木は哀果と初対面の日の日記にこう記している。「ただ予のすぐ感じたのは、土岐君が予よりも慾の少いこと、単純な性格の人なことであった。(中略)土岐君は頭の軽い人である。明るい人である。土岐君の歌は諷刺皮肉かも知れないが、予の歌はそうじゃない。」(「明治44年当用日記1月13日」)

#### (4)

62ダイナモの

重き唸りのこちよさよ

あはれこのごとく物を言はまし（『一握の砂』）

「明治43年歌稿ノート」中の8月3日夜～4日夜の作24首中の一首である。

『一握の砂』ではつぎの歌とならんでいる。

61真剣になりて竹もて犬を撃つ 小児の顔を よしと思へり

この歌は歌集初出であるが、2首を並べて作者の意を表明しようとしたものである。

134叱られて わっと泣き出す子供心 その心にもなりてみたきかな

138庭石に はたと時計をなげうてる 昔のわれの怒りいとしも

いずれも明43.9.9日夜の作である。子供があるいは幼年時の自分が何思うことなく自由にふるまっていることをうらやみ、あるいはなつかしがつているのである。いずれも大逆事件後の啄木のめざめと、それに対して、自由に行動することも、ものを言うこともできないことを「ダイナモ」や「子供」に托して嘆き、かつ、腹を立てているのである。

「一握の砂」（「盛岡中学校反会雑誌」第10号，明40.9.20刊）の中で啄木はこう言っている。「神の如く無邪気なる小児ほど何物にもまして貴きものは無からむ。」と、啄木は小児を礼讃しているが、その小児も成長するに従って

「我とわが心の自由を殺し」てゆく、「人の思惑にのみ心を牽かれて、心ならざる事を言ひ、または行ふに至り、茲に一切の悪徳生る。」と言ひ、「かの小児の心の全く死し尽したる時、人はこれを称して成人したりと謂ふ。」と言っている。小児の純真神の如きを失なわせるものが大人の世界であり、教育であると見、それを自然に対する反逆と見、それに対して正しき反逆をしよう、教育を改めようというのが、この「一握の砂」という文章で啄木が述べている考えなのである。そして、また、その文中で「我等何故に赤裸々なる能はざるか。公明なる能はざるか。天真なる能はざるか。大いなる声にて物いふ能はざるか。（中略）その理あるなし。然らば即ち我等は『正しき反逆』の児たらざるべからざるなり。」と言っているのである。

数え年22才の啄木の意気はさかんであるが、25才の啄木にとっては、官憲を意識しつつ、自由に、思うままにもの言うことができないのは、まことにはがゆいことであつたらう。

## (5)

243ふるさとに入りて先づ心傷むかな

道広くなり

橋もあたらし(『一握の砂』)

「明治43年歌稿ノート」中の8月23日作のうちの一首である。啄木は明40.5  
4日の校長排斥のストライキ後、浜民村を去って以来、浜民村へは帰っていない。したがってこの作は想像作である。道が広くなり、橋が新しくなったこと  
の事実関係は浜民村の村史によらなければならないが、啄木はそういうことを  
悲しんでいるのである。

啄木のふるさと観として次の歌をあげ得よう。

211田も畑も売って酒のみ ほろびゆくふるさと人に 心寄する日

212あはれかの我の教へし 子等もまた やがてふるさとを棄てて出づるら  
む

213ふるさとを出で来し子等の 相会ひて よろこぶにまさるかな しみはな  
し

この三首は「スバル」(明43.11)に発表された「秋のなかばに歌へる」110  
首中に収められているもので、この一連は『一握の砂』編集の際書き加えるべ  
きものを追加創作した作であろうと思われる。『一握の砂』中最も遅く作られ  
た作品の一であろう。標記の243より遅れて作られたものと考えられる。

この三首によれば、ふるさと人は仕事や生活に満足できず、酒を飲んでうさ  
ばらしをして日日を送っているのであろう。青年たちは仕事を求めて村を出な  
ければならなかったのであろう。これが東京にあって啄木の思い浮べるふるさ  
との人々の状態なのである。そういうふるさとに橋ができたり道が広くなっ  
ても何のためになろうか。ふるさと人のための施策は行なわれていないし、ふる  
さと人は無為に日を送っているという嘆きを歌としたものである。

啄木は明39.3月に父の宝徳寺復帰運動のためと、郷里の少年の教育のため  
に小学校の教員となるために浜民村へ帰った。実は、啄木が郷里へ帰っていく  
ばくかの収入を得るためには、浜民村では、小学校教員となるより他に就職口  
はなかったろう。さて、そのころの啄木日記にこの歌の説明を早くも行なって



いるような文章があるのでここに引用しておく。時に啄木数え年21才であった。

「自然の平和と清浄と美風とは、文明の侵入者の為に刻々荒されて、滅されて行く。蜂の生えた官人が来た。鉄道が布かれた。商店ができた。そして無智と文明との中間にふらつく所謂田舎三百なるものが生まれた。(中略)文明の暴力はその発明したる利器を利用して驟々として自然を圧倒してゆくのだ。かくて純朴なる村人は、便利という怠惰の母を売りつけて懐をこやす伶俐なる人を見、煩鎖な法規の機械になり、良民の汗を絞って安楽にいばって暮らしてゆく官人を見、神から与えられた義務を尽さずにも生きることのできる幾多の例証を見た。かくて美しい心は死ぬ。清浄は腐れる。美風は荒される。遂に故郷は滅びる。」(「渋民日記」明39.3.8日)

これを読むと今日の問題である「開発と破壊」破壊というのは自然破壊のみでなく人心破壊でもあることを啄木は早くも論じていることに気付くのである。

## (6)

### 541 マチ擦れば

二尺ばかりの明るさの

中をよぎれる白き蛾のあり(『一握の砂』)

「明治43年歌稿ノート」9.9夜作の39首中の1首で「創作」(1の8, 明43.10) 所載の「九月の夜の不平」34首中の1首である。筆者はこの「九月の夜の不平」を啄木短歌の一つの頂点と考えているが、この作品34首中の28首が『一握の砂』に収められている。そういう点からこの9月9日夜の作を注意すべきだと考えている。

この歌が掲載された翌月の「創作」11月号で木村青草がこの「9月の夜の不平」を評し、その中でこの歌についてこう記している。

「これがまた馬鹿にいい。非常に潤いがある。白い蛾がハッキリ眼に浮ぶ。そして何事か蛾の運命について考えさせられずにはいられない。」

この年の啄木日記は4月のところがすこしあるだけであるが、この一年をまとめたものを「明治四十四年当用日記補遺」とし、「前年(四十三)中重要記

事」として収めている。その中で前年の6月についてこう記している。

「幸徳秋水事件発覚し、予の思想に一大変革ありたり。これよりボツボツ社会主義に関する書籍雑誌を聚む。」

またこの前年を概観している中でこう記している。

「思想上に於て重大なる年なりき。予はこの年に於て予の性格、趣味、傾向を統一すべき一鎖鑰を発見したり。(注7)社会主義問題これなり。予は特にこの問題について思考し、読書し、談話すること多かりき。ただ、為政者の抑圧非理を極め、予をしてこれを発表する能はざらしめたり。(中略)また、予はこの年に於て、嘗て小樽に於て一度逢ひたる社会主義者西川光次郎君と旧交を温め、同主義者藤田四郎君より社会主義関係書類の貸付を受けたり。」

また、啄木は、明44.2.6日の大島経男宛書簡で大逆事件発覚のころの自分の気持をこう記している。

「私は一人で知らず知らずの間に Social Revolutionist となり、いろいろの事に対してひそかに Socialistic な考え方をするようになっていました。ちょうどそこへ伝えられたのが今度の事件でした。(注8)知らず知らず自分の歩み込んだ一本道の前方に於て、先に歩いていた人達が突然火の中へ飛び込んだのを遠くから目撃したような気持でした。」

こう見てくると筆者は木村青草の感想をすこしはっきりとさせて、大逆事件の被告たちが啄木の前にちらりと姿を見せて、消えて行ったことを蛾に託して詠んだものと見てはどうかと思うのである。

なお、同様の手法や、ある点で似ていると思われる作を記しておく。

・アーク燈点(とも)れるかげをあるかなし螢の飛ぶはあはれなるかな(『桐の花』)  
北原白秋

・大きな手があらはれて昼深し上から卵をつかみけるかも(『雲母集』)

北原白秋

・昼ながら幽(かす)かに光る螢一つ孟宗の藪を出でて消えたり(『雀の卵』)

北原白秋

・白き手がつと現れて蠟燭の心(しん)を切るこそなまめかしけれ(『酒ほがひ』)

吉井 勇

・ひたぶるに暗黒を飛ぶ蠅一つ障子にあたる音ぞ聞ゆる（『あらたま』）

齊藤茂吉

それぞれの作者らしい歌である。これらの歌は形の上からはきっちりとまとめられているが、啄木作は「マチ擦れば」——「二尺ばかりの明るさ」が暗黒の中に浮び上がる。その「明るさの中を」というところを簡略にしたために一種の表現上のもの足りなさがあり、そこに一種の不足感がでてきて、その消えて行った蛾のゆくえを求める心が読者に湧いてくるのであろう。その点が、白秋の螢2首や、勇の白き手と感じがすっかり違っているのだと私考する。白秋の「大きな手」は一種の無気味さがあり、茂吉の「蠅」は茂吉らしい強さがあるが、すべて表現が完結していると思う。

そして、この啄木の歌を読むと筆者は茂吉のつぎの一首、大平洋戦争後、最上川のほとりに疎開していた茂吉、戦争に破れたことを痛感し、どうすべきかを、それも心はかなく思っているらしい茂吉の作が筆者の心に浮んでくる。

彼岸（かのきし）に何をもとむるよひ闇の最上川のうへのひとつ螢は

この茂吉作にくらべると、啄木作はどれも浅い感じがするようである。年齢や人生体験の違いというものが土台にあるからであろう。

## （7）

110何がなしに

頭の中に崖ありて

日毎に土のくづるごとし（『一握の砂』）

啄木の「歌稿ノート」明43.10.13日夜の作であるが、「スバル」（明43.12）では、第1、2句が「悲しくも頭（かしら）の中に」とある。『一握の砂』校正後の改作であろうと思われ、私見としてはこの方がすぐれていると思われるが、一応『一握の砂』所載のものを掲げておく。

さて、「歌稿ノート」によれば、この作を作った明43.10.13日夜は26首を作っており、そのうち21首が『一握の砂』に収められているがその中にこういう作が見える。

98どんよりと くもれる空を見てゐしに 人を殺したくなりけるかな

109こつこつと空地に石をきざむ音 耳につき来ぬ 家に入るまで  
 111遠方に電話の鈴（りん）の鳴るごとく 今日も耳鳴る かなしき日かな  
 118たんたらたらたんたらたらと 雨滴（あまだれ）が 痛（いた）む頭に  
 ひびくかなしさ

啄木はこれらの歌を作った10日ほど前、明43.10.4日付の官崎郁雨宛 書簡の中で「秋になって皆健康になった。僕も耳鳴りがしなくなった。」と書いている。その後再び耳鳴りがしはじめたのか、耳鳴りしたところを材として作ったものか明らかでないが、これらの歌はその手紙に見える耳鳴り、おそらく頭痛を材として作られたことはまちがいない。

この歌の「頭のなかに崖ありて日毎に土のくづるる」というのは比喻であるが、恐ろしいことばである。実感から出た恐怖感なればこそこういう歌ができたのであろう。

なお、「歌稿ノート」では、同日作でこの歌の近くにつぎの歌が見える。

119或る時のわれの ころろを 焼きたての 麵包（ぱん）に似たりと思ひけるかな

この歌の原作は「歌稿ノート」によれば、第一句は「今日はふと」となっている。これによれば、「今日はふと自分の心を焼きたてのパンのようにやわらかな新鮮なものと思ったことよ。」ぐらいの意になる。頭痛がなおっていることに気付いた日の作ということになろう。しかし、改作の「或る時の」に従うと、「われのころろを焼きたてのパンに似たと思った」のは現在でなく、過去のある時のことである。現在は頭がくずれてゆくように痛いのである。

こう解してくると、頭痛の歌とやきたてのパンの歌を作った日は、すでに耳鳴りから解放されていたのが事実で、『一握の砂』に収める時、やきたてのパンのような心は過去のもので、現在は心がくずれるように痛い<sup>つら</sup>と暗い方へ改めたものであろうか。（注9）

なお、この歌を読むと連想される作があるので引用しておく。与謝野寛の『鴉と雨』（大正4刊）中の「自らを嘆ふ歌」（1908年—1910年）中のつぎの一首である。啄木の頭の中の崖よりも落ち付いているがこれも深いかなしみがこめられているようである。

不思議なる Pisa の斜塔かわが心しづかなる日に黒く傾く

与謝野寛

(8)

276ひでり雨さらさら落ちて

前栽の

萩のすこしく乱れたるかな (『一握の砂』)

『一握の砂』の中に作歌年月未詳であるが、こういう歌が見える。こういう自然詠は啄木としては珍らしいように思われるが、そのつもりで見てゆくと相当数が見出される。主観語を交えているものまで含めて書きぬいてゆくとつぎのようである。こういう作は明41.8月以後の「秋風のこころよさに」の時期からだと考えられる。

270\*はたはたと黍の葉鳴れる ふるさとの軒端なつかし 秋風吹けば (明41.8.8日)

278\*雨後の月 ほどよく濡れし屋根瓦の そのところどころ光るかなしさ (明41.8.29日)

263\*秋の辻 四すぢの路の三すぢへと吹きゆく風の あと見えずかも (明41.9.12日)

267\*さらさらと雨落ち来り 庭の面の濡れゆくを見て 涙わすれぬ (同上)

486\*港町 とろろと鳴きて輪を描く鳶を庄せる 潮ぐもりかな (明41.10.10日)

457\*小春日の曇硝子にうつりたる 鳥影を見て すずろに思ふ (明41.10.23日)

488\*ひとならび泳げるとき 家家の高低の軒に 冬の日の舞ふ (明42.1.9日)

485裏山の杉生のなかに 斑なる日影這ひ入る 秋のひるすぎ (『一握の砂』初出)

上記のうち\*印をつけた歌は、歌会席上や徹夜百首会などでの作であるので囁目詠ではない。記憶の中からこういう歌を啄木は作ったのである。また、北海道時代を回顧した作の中にもこの種の作が見えるのである。

334雨に濡れし夜汽車の窓に 映りたる 山間の町のともしびの色（「学生」  
創刊号明43.5）

368うす紅く雪に流れて 入日影 曠野（あらの）の汽車の窓を照らせり  
（「スバル」明43.11）

375ごおと鳴る風のあと 乾きたる雪舞ひ立ちて 林を包めり（同上）

376空知川雪に埋れて 鳥も見えず 岸辺の林に人ひとりゐき（『一握の砂』  
初出）

384しらしらと氷かがやき 千鳥鳴く 釧路の海の冬の月かな（「東京朝日」  
明43.5.9日）

407浪もなき二月の湾に 白塗の 外国船が低く浮べり（「スバル」明43.11）  
そして、こういう態度で都会風物も詠じている。

452赤煉瓦遠くつづける高塀の むらさきに見えて 春の日ながし（明41.11  
19日）

453春の雪 銀座の裏の三階の煉瓦造に やはらかに降る（「東京朝日」明  
43.5.16）

454よごれたる煉瓦の壁に 降りて隔け降りては融くる 春の雪かな（同 明  
43.31.8）

464赤赤と入日うつれる 河ばたの酒場の窓の 白き顔かな（同、明43.5.21  
日）

上記454の作は、正岡子規の

松の葉の葉毎に結ぶ白露の置きてはこぼれこぼれては置く

の影響下の作か無関係か、おそらく筆者は無関係であろうと思う。他に子規  
作歌を連想させるものが見当たらないことからそう判断するのである。

いずれにしても啄木短歌の中には——それが心象を詠じている作もあるよう  
であるが、こういう写生詠のあることも記憶にとどめておくべきであろう。

# （9）

311をさなき時

橋の欄干に糞塗りし

話も友は悲しみてしき（『一握の砂』）

『一握の砂』編集の時、函館時代の友である岩崎正を材とした次に記す310の歌に312とともに書き加えたものであろう。歌集初出である。

310目を閉ぢて 傷心の句を誦してゐし 友の手紙のおどけ悲しも（「スバル」明43.11）

312おそらくは生涯妻をむかへじと わらひし友よ 今もめとらず（『一握の砂』初出）

310の「傷心の句」と「おどけ」311に「橋の欄干に糞を塗」といういたずらと「悲しみ」312では「生涯妻をむかへじ」という寂しい考えと「わらひし」という語という風に3首とも悲しみと笑いとが入り交っている。岩崎正は郵便局に勤め、6人の家族の中心とならねばならぬ境遇であったという。文学好きで貧困で屈折した心動きを見せる岩崎を啄木はこう描いたのである。

啄木は函館の宮崎郁雨宛明43.10.10日付書簡で『一握の砂』刊行を報じたあとでこの歌についてこう記している。

「今度新しく作った歌が大分ある。北海回顧の歌（百首余）は『忘れがたき人々』という題で一まとめにして入れる。いかに文学をイヤになった君でもこれだけは興味を持って読まずばなるまい。岩崎君が幼時橋の欄干に糞を塗った話まで歌ってあるからね。」

さて、この歌をぬき出したのは、「糞」というものを短歌の世界に持ちこんだ啄木の大胆さを記しておきたいと思ったからである。大小便などは神話・伝説・昔話などに見えようけれど（今思い浮べたものを記すとスサノヲノミコトの高天原の話・播磨風土記のオホナムチとスクナヒコナの壟岡（ハニオカ）の話、昔話ではたとえば貝女房などがある。さがせばかなりの数であろう。俳諧では、犬筑波にも見え、芭蕉作にも見える。）和歌はもちろん短歌では珍しい素材である。

東北地方は昔話の宝庫と考えられている。その地で育つた啄木もここで、昔話の語り手のような心で、この歌を作って大いに笑ったのかも知れない。

なお、3年ほど以前、御坊川の近くの寺で高松市公害対策協議会というのが開かれたことがある。その時、その近くに住むH氏、若い時は小作争議をたた

かい、のち労農党より県会議員に出たり、終戦後社会党から出て衆議院議員になったH老が、この御坊川は昔はきれいな川であった。夏になると螢がたくさん飛んだ。それを取りに町の人がたくさん来た。私ら子どもはそのへんの草に糞をぬりつけておくというイタズラをしたものだとして笑って語られたことがある。その時、私ははっとこの歌を思い浮べたものである。

## (10)

62百姓の多くは酒をやめしという。

もっと困らば、

何をやめるらむ。(『悲しき玩具』)

明44.1.11日の啄木日記によれば「米内山(注10)が来て、東北の田舎でも酒の売れなくなった話をした。」とある。

つづいて、同13日に初めて土岐哀果と逢うたことを日記に記し、「一しょに雑誌を出そうという相談をした。『樹木と果実』という名にして、ともかくも諸新聞の紹介に書かせようじゃないかということになった。」と記している。

そして、同16日の日記には「社で安藤氏(注10)に逢ったから精神修養へ半頁だけ予らの雑誌の広告を出して貰うことにした。『それは面白い。大いにやり給え。少しぐらいは寄付してもいい。』と安藤氏が言った。」とあり、この日の発信欄に「精神修養社へ原稿を送る。」とある。この前日の日記の発信欄に「詩六章を書いて『精神修養』へ送った。」とあり、その詩六章が「精神修養」

(2の2, 明44.2月)に収められているので、この16日の「精神修養」宛の原稿は「樹木と果実」の広告文であつたろうと推察される。

さて、「樹木と果実」の広告は「スバル」と「創作」の2月号、「精神修養」の3月号に掲載されている。前二者はほぼ同文の宣言文とも言うべきが掲げられている。

『樹木と果実』は赤色の表紙に黒き文字を以って題号を印刷する雑誌にして主に土岐哀果・石川啄木の二人之を編輯す。雑誌は其種類より言へば正に瀟洒たる一文学雑誌なれども、二人の興味は寧ろ文壇の事に関らずして汎く日常社会現象に向ひ澎湃たる国民生活の内部的活動に注がり。雑誌の立つ処自ら現時



の諸文学的流派の外にあらざる可らず。雑誌の将来に主張する所亦然らむ。二人は自ら文学者を以て任ぜざるの誇を以て此雑誌を世の文学者及び文学者ならざる人々に提供す。」「スバル」(明44・2)

この文章中のアンダーラインを引いた箇所が「精神修養」のものではつぎのように改められている。

「二人の興味は寧ろ文壇的生活にあらずして広く實際社会に向へり。二人の歌は所謂歌に非ずして日常事務的生活の間に発見せられたる貴重なる記録かつ峻峭なる批評なり。」

この宣言文は、「創作」のものが岩波版啄木全集に収められているが、「精神修養」のものは当時未発見のためか収められていない。筑摩版啄木全集では無署名のためかいずれも収められていない。筆者は「精神修養」のものを岩城之徳氏著『石川啄木』(近代文学注釈大系・有精堂版)の頭注によって読み得たが貴重な紹介であったと思う。つまりここで、啄木はその短歌を「貴重なる記録かつ峻峭なる批評」と見ているのであって、前年、明43年12月の「歌のいろいろ」(「東京朝日」)中に見える「歌は私の悲しい玩具である。」の考えから抜け出していることが認められる。

そして、「精神修養」へおそらくこの広告文を送った翌日夜、啄木は「百姓の多くは酒をやめしといふ……」の一首を作っているのである。同1・18日の日記に「午前に前夜の歌を清書して創作の若山君に送り云云」と記しており、それが「創作」(2の2, 明44・2)に発表された「都合わるき性格」20首で、その中に上記「百姓の」が含まれているのである。

そして、この歌では、かつて彼の作った

211 田も畑も売りて酒のみ ほろびゆく ふるさと人に 心寄する日 (明43・8・23)

に見える感傷性は見えず、唯一の楽しみまで貧のために奪われた農民たちにどうせよと言うのかと詰問しているようである。前記の「記録と批評」の精神がこもっている。

しかし、啄木はこの後間もなく、翌2月はじめ発病、入院することとなり、以来療養生活にはいり、この種の歌があまり見えないのが残念である。

## 注

- (1) 筆者の「明治44年1月の石川啄木」(「香川大学一般教育研究」第2号, 明47.4.28発行) 参照。
- (2) この時、被告のうちの一人が神田署内の留置場の板壁に「一刀両断天王首」と落書したことが西園寺内閣を一段と苦しい立場に立たせたという。
- (3) 赤旗事件については絲屋寿雄氏著『大逆事件』(三一書房刊) によった。
- (4) 啄木は、浜民村小学校の代用教員時代に書いた「林中書」(「盛岡中学校校友会雑誌」第9号, 明40.3.1) の中で、「ロシア人の最大多数はその一切の自由を政治上並びに宗教上の主権者なるザーに奪われている。」と記し、また「今年の夏、ゴルキイ氏が北米の新聞記者に語ったところによると、カンというロシアの一地方の農民どもは、饑饉救助のために政府の与えた若干ずつの金を以て、パンを買わず衣をも求めず、皆こぞって銃と弾丸とを購(あがな)ったと言うではないか。銃と弾丸とは、説明するまでもない。彼らの奪われたる自由を取戻すべき武器であるのだ。(中略) この烈火の如き自由の意気は、やがて一切の文明を吞吐し、洶湧すべき一大鎔鉱炉ではないか。人生の最大最強の活力ではないか。」と若き啄木、数え年21才の啄木は言っている。この「若しも我……」の作は、そういうロシア国民の自由を求めるザーとの戦いに共感を示しているのである。
- (5) この書簡の中で啄木は「僕は一新聞社の雇人として生活しつつ将来の社会革命のために思考し準備している男である。」と言ひ「僕は必ず現在の社会組織経済組織を破壊しなければならぬと信じている。」とも言っている。啄木のやりたかったのはこういう事であるが、大逆事件直後のこの時、それは全くできないことであってそれを啄木は嘆いているのである。なおこのことについては(注1)の筆者の稿を参照してほしい。
- (6) 筆者は、『一握の砂私論』(「香川大学学芸学部研究報告」第16号, 昭38.1.25) の中で、「啄木短歌に見える喚体歌について」という章を設け、この種の歌の特徴と、啄木短歌にあってこの形式がどういう意義を持っているかを考察した。なお、この論は、「日本文学研究資料叢書」のうちの『石川啄木』(有精堂版) に収められ、また、筆者著『啄木短歌の研究』(桜楓社版) にも収めてある。
- (7) 「一鎖論」という語を啄木は透谷の文章からとったものと筆者は考える。透谷はその「厭世詩家と女性」(明25)の巻頭で「恋愛は人世の一秘鎖なり」と述べている。その鎖(やく)——かぎの意——を採って、恋愛をカギとするよりも社会主義思想を人生上のカギとすべきだと述べているのだと思う。小田切秀雄氏は講談社版文学全集の解題でこの「秘鎖の語は一般にはほとんど使われることがない。」と述べているが、啄木はこの鎖字をもって透谷に挑戦しているかに見えるのである。
- (8) 大逆事件のことを当時一般に「今度の事」と言っていたことを啄木は「所謂今度の事」(明43年秋稿) という当時未発表の文章で述べている。
- (9) この焼きたてのパンを今井泰子氏は「外見はみごとに色よくふくらんでいるが押せばつぶれてしまう。すぐなえしぼむくせに何か新しいことを思いつき張りきつて

みる『或る時のわれのころ』を歌う。」とこの歌の前においた歌と合せて解してられる(全氏著『石川啄木』角川書店刊)のはいかかと思う。主観的かも知れないが「焼きたてのパン」のイメージが違うように思う。歌集の前後の歌と合せて解しようとされる氏の考え方は理解されるが、それが無理な場合もあると思われる。

(10) 米内山健助のこと、筑摩版全集第7巻426頁にその紹介がされている。岩手県出身で当時日本歯科医専の学生であり、一方、郷理より炭を送って貰い炭屋をもやっていた。明44.10.1日付啄木の米内山宛書簡では、珍しいものを貰った礼と、10月分はきっとお払いするから、8月分残りと9月分はすこし待ってくれと言っている。啄木を最後まで薪炭方面で面倒を見た人であろう。

⑪ 安藤正純のこと。啄木全集第7巻405頁によれば、啄木の朝日新聞での上司で、その親戚である哀果の第1歌集「NAKIWARAI」の書評を啄木に依頼した。結局この人の存在が啄木・哀果の交遊のキッカケを作ったことになる。また雑誌「精神修養」にも関係し、啄木に寄稿を求めた人である。のち政治家となり、国務大臣、文部大臣を歴任した。